

■□ 報告Ⅳ

地域の協働で子ども食堂 －わいわい子ども食堂の実践－

杉崎 伊津子 (あいちこども食堂ネットワーク共同代表)



皆さん、こんにちは。あいちこども食堂ネットワークの共同代表ということで、2人で代表をしまして、私は名古屋市内の代表をしています、杉崎と申します。

私の話のテーマは「地域の協働で子ども食堂」です。私たちが医療生活協同組合や地域の保育園などの仲間と一緒に子ども食堂を始めたという実践の報告をさせていただきます。

私は、72歳の、子ども食堂をやっているおばあさんですが、もともとは社会保険庁（現在は日本年金機構）愛知事務局で、定年退職するまで国家公務員として年金・医療の行政事務の仕事をしてきました。そのことで社会保障について、いろいろと勉強してきました。それを地域の皆さんに返そうということで退職後も社会保障の学習会等の講師活動を積極的にやってまいりました。

退職しましたら、北医療生活協同組合から「仕事をしてくれないか」と言われまして、何も知らないまま副理事長ということで飛び込んでいきました。そのなかで「特に若い世代への働きかけを強めなければいけない。世代交代をどうつくっていくか」という大きな課題がありました。若い専業主婦で子育てをしている人たちに遊び場をつくってあげようということから始めて、ファミリーサポートチームを立ち上げて、親子の遊び場活動を続けて、もう10年が過ぎました。いまでも毎週1回、4カ所で遊

び場をつくっています。

そのことから子ども食堂へのきっかけができ、退職後に思ってもみない人生体験をさせていただき、医療生協の活動にすごく感謝をしています。

現代の貧困は、最初に松尾先生がおっしゃったように、本当に見えないですね。見えない貧困のなかで、特にしわ寄せが来ているのは「食」の問題だと思います。食は命・健康の問題ですから、その意味で、私たちはファミリーサポートチームのなかで若いお母さんたちや子どもたちの食について、さまざまな議論をしてきました。そして学習会も行ってきましたが、食べ物が非常に偏っている事がわかりました。好きなものばかり食べている。お父さんがあまり早く帰ってこない。アンケートを何度取っても、夕食はお母さんと子どもだけというパターンが圧倒的に多いのです。

そういうなかで、食事もついつい簡単になって、メインのものだけとか、炭水化物ばかりの家庭が非常に多いということがわかってきました。最近では、朝ごはんを食べていない子どもたちが非常に多いということもわかりました。コンビニ等がたくさんできて、便利になればなるほど孤食が多い。一人ひとり、勝手に好きなものを買ってきて食べている子どもたちも出てきている。調理体験が本当になくて、いままで子どもたちに日本食として作ってきたようなものが、全然作られていないことがわかつ

てきました。

そういう貧困が、いま現れていて、もちろん、お金がないなど、さまざまな貧困が重なってきている。それは、普通に子どもたちを見ても、街で行き合っても、なかなかわからないというのが現状だと思います。

今日は150人ぐらいいらっしゃるようですが、皆さんは子ども食堂を知っていますか？知っている方は手を挙げてみてください。すばらしい！さすがに生協関係の方たちですね。じゃ、行ったことがある方は？やっぱり行ったことがある方は4割もないかもしれないですね。それが現状だと思います。つい先日発表された全国調査の結果でも、「知っている」が約7割ですが、「内容を知っている」と答えた人は4割ぐらいでした。

子ども食堂とはどんなところか、あらためて定義すると言っても、何も決まりはありません。2012年に東京・大田区の近藤博子さんという八百屋さんが、近所のご飯を食べられていない子どもを見つけて、「呼んでやればよかったなあ」ということで始められたもので、その定義は「こども食堂とは、こどもが一人でも安心して来られる無料または低額の食堂」です。

貧困対策としての子ども食堂が非常にアピールされて、「貧しい子どもが行くのだから」と、偏見を持っている方がいます。私たちが子ども食堂を始めるとき、民生委員さんの集まりに説明に行って、「この地域にすごいニーズがあるので、子ども食堂を始めました」と言ったら、「うちの地域の子はそんなに貧しいのか」と怒られ、「子ども食堂なんて、やってもらっては困る」という声もなきにしもあらずでしたが、「子ども食堂は、みんな来ていいんだよ。あなたの居場所ですよ」というのが、現在の多

く子ども食堂が共有している定義ではないかと思っています。

大田区に初めてつくられて、「子ども食堂」というネーミングがとてもわかりやすいということで、瞬く間に広がりました。2018年3月時点で、全国2286カ所になっています。愛知県も今年5月には140カ所にまで増えています。今年の6月26日に、湯浅誠さんが全国のネットワークや自治体等を対象に調査された結果の発表がありました。それによると、少なくとも3718カ所を確認することができたそうです。昨年から1400カ所も増えています。子ども食堂がすごい勢いで増えているのだと、あらためて認識しました。

都道府県別充足率は17.3%となっています。何を充足率とするかですが、全国の子ども食堂関係者の間では「小学校区に1つの子ども食堂をつくろう。子どもが歩いて行ける距離に子ども食堂をつくろう」ということで、「小学校区に1つ」を目標のようなものにしています。その小学校区数で割って出したのが、平均的に17.3%充足しているということで、6小学校区に1カ所の割合になります。都道府県別に比べると、愛知県は20位です。京都は28.6%で、110カ所あり、全国7位と優秀です。

児童館は、行政区ごとに設置されるなどして、全国に4000カ所あります。そう考えると、きわめて緩やかな、民間の、友だち同士で始めたような子ども食堂が、児童館数に迫るかたちでできてきたわけで、この新しい活動は大きな注目を浴びるものになっていると思います。

子ども食堂は多種多様です。自発性と多様性が命というか、定義もなければ届出制もないんです。保健所も「届けてください」とは一切言いません。「衛生に気をつけて、食中毒を出さないように、ちゃんと頑張っ

てやってくださいね」という感じで、本当に任意のものでですから、多様です。誰かが始めて、「私たち、子ども食堂なんです」と言えば、子ども食堂です。

名古屋市内では、NPO 法人、友人・知人、地域団体、宗教団体、飲食店、社会福祉法人、病院、生協など、いろいろなところがやっています。多くの場合、子どもは無料で、月1回ぐらいしかできていないのが現状です。大きいところでは200人近くの子どもの一度に食べに来てテンヤワンヤという例もあるし、小さいところでは20人ぐらいの規模もあります。

重要なのは、食事だけではないということです。宿題を見てあげたり、絵本の読み聞かせをしたり、ゲームをしたり、いろんなことを付属して取り組んでいるところが圧倒的に多いというのが子ども食堂の特徴です。

子ども食堂のきっかけですが、学童期の親子とのつながりを創りたいというのが私たちの想いです。北医療生協のファミリーサポートチームで、若いお母さんたちとの遊びの場を提供してきましたが、3歳頃になるとみんな卒業してしまって、私たちとも縁が切れてしまうので、「その後の学童期の子どもたちはどうしているのだろう。地域まるごとの健康づくりと言いながら、そこはすっぽり抜けている。そこをどうするのか。何かをしなければいけない。継続的なことをしたいよね」ということで、議論や学習会をしてきました。

そのころ、名古屋市が2014年から学習支援を始めます。北医療生協も「子どもの貧困の連鎖をどう止めるか」という議論のなかで学習支援をやりたいと思っていたので、すぐに手を挙げて、中学生の学習支援事業を名古屋市から委託されました。

そこは生活保護世帯の子どもたちが来る

場所で、初めてそういう子どもたちと接触するなかで、「学校で給食がないと痩せる子がいるんだよ。夏休みとか、痩せて来るんだよ」という話を聴きました。休憩時間におにぎりなどを出すようにしていますが、「いつも一番におにぎりに手を出して、一番大きいのを選ぶ子どもがいる」とか、「残ったら必ず、『これ、もらっていいかい？ お父さんに持って帰りたい』と言う子どもがいる」という話から、子どもたちの生活に大変な問題があることがわかってきて、何か食べることをやろうということになりました。

それで、子ども食堂というものがあることを知って、さっそく東京へ見学に行き、すぐに始めました。それが2015年11月で、これが名古屋市内で第1号の子ども食堂ということでマスコミもどんどん取り上げてくださいました。そのおかげで寄付もたくさん集まったので運営できた、というのが現状です。

どう運営するかを考えたとき、「自己完結にしない」というのが私たちのいちばんのこだわりでした。これまで北医療生協の組合員さんの活動としていろんなことをしてきましたが、「それでは地域まるごとではないんじゃないの？ 組合に入っていない人たちはどうするの？ その人たちにも視野を広げた活動をしないといけないんじゃないの？ もっと広く、みんなの子ども食堂にしたいよね」ということで、法律事務所や保育園に声をかけました。

法律事務所が子ども食堂をやるなんて、おもしろいですね。普通は考えられませんが、北法律事務所には友の会があって、その皆さんが「やりましょう」と言ってくださいました。保育園も「やりましょう」ということで、みんなで一緒になって任務分担をしながら始めることにしました。

この「1カ所だけでやらない」というこだわりが大事で、そのために時間はかかりました。「理事会を通さないといけない」とか「きちんと要領を示さないといけない」とか「責任はどう取るのか」と言われましたが、なんとかクリアして始めて、いまでは2カ所で子ども食堂を運営しています。この夏休みには、朝ごはんに挑戦するお試しの準備を始めています。ですから、こういうこだわりは、とてもよかったなと思っています。

協同の効果としては、「地域まるごと」を本当にどうしていくのかということです。理事会でも、「なぜ組合員にもならない人たちに、そんなことまでしてやるんだ」という意見が出ました。それはファミリーサポートチームをつくったときにも言われたことです。

でも、私たちは、「その方たちは、たまたまいま組合員じゃないだけで、将来なられるかもしれないし、子どもたちが大きくなって組合員になるかもしれない。そういう種まきだし、組合員だけを見ていては間違いではないか。それは地域まるごとではないんじゃないか」という議論をしながら進めていきました。そのことがとてもよくて、「地域のみんなの子ども食堂なんだ」という意識を持ってもらえるようになりました。

だから、「こだわって、よかったなあ」と、つくづく思っています。学習支援をしているグループも手伝ってくれて、若い方たちや学生も応援に来てくれたりしますので、よかったなと思っています。「医療生協の子ども食堂ではない」と、いつも言っていて、「みんなの子ども食堂、地域の子どもの食堂なんです」というのを“売り”にしています。

この子ども食堂をやることで、見えてき

たことがあります。当初は子どもから200円の参加費をもらっていましたが、その200円がないので来ることができない子どもがいるということがわかったんです。非常に衝撃を受けて、その後すぐ、企業等から助成金をもらって、無料化しました。

そういう子は見えません、普通ですから。ちっとも来ないからと心配していたら、そういう事実がありました。生活保護を受けていました。

それから、虫歯だらけの4、5歳の子どもさんを見つけて、いまだに手が打てていません。親がいるので、親と話し合って進めないといけないのですが、お母さんも病気です。そういう見つけたときの対応の困難さもあるなと思っています。

低学力児の問題は、本当に心が痛みました。この問題を見つけたことによって、自主的に小学生のための学習支援を2カ所で週1回ずつやっています。そこでもまずは食べさせること（おにぎりを作って食べる）からやっていますが、1年生、2年生の子たちでも、字が読めない・書けない子どもたちがいます。外国にルーツのある子どもたちにも、なかなか難しい問題があって、どうしても手を打たなければいけません。

名古屋市は、中学生対象に学習支援を公的にやっていますが、中学生では遅いのです。小学校3・4年生できちっとやらないと普通の学力を身につけることはできないことがわかっています。

ヤングケアラーも見つけました。これは本当につらいのですが、生活困難な家庭は兄弟が多いというのが特徴です。学習支援に来ている子どもたちも、5人、6人、7人と兄弟がいて、一番上の子は20歳なのに、一番下の子は赤ちゃんだったりする。そういう家庭ではお母さんの代わりに、お兄ちゃんやお姉ちゃんが下の子の世話を全

面的にしていって、学校にも行けないまま高校進学の時期を迎える。高校に行っても、テストで点が全然取れず、0点になってしまっ行って行けない。そういう子が見つかって、本当に心が痛みました。「この時代に、そんな子がいるの?」と言われてたりしましたが、現実にいるのです。

子ども食堂は、ボランティアさんにとっても、本当にいい居場所というか、仕事がわかりやすいので、行けばすぐに手伝えるのですね。ボランティアの7割の方が、ほぼ毎回参加型です。たしかに年金を受給している高齢者が多いですが、若い方もそこそこ関心を持って来てくださいます。「どうして来たの?」と聞くと、若い人は「新聞記事を読んで」「テレビを見て」と言う方があります。その時だけはわざわざ会社を休んで来てくれる方も、あります。学生は非常に貴重ですね。

子ども食堂は、貧困対策のようなかたちで始まりましたが、そうではなくて、いまこそ、みんながそういう居場所を必要としているんだなということが、つくづくわかりました。多世代の人たちとの交流のなかで、大変な子どもたちの状況や子どもの悩みや抱えている問題に気づき合う場所で、貧困対策なんて私たちには何もできません。でも、気づきとパイプ役はできると確信しています。赤信号になる前に助けていく。何か、つながりをつくっていくことに軸足を置きながら、これからも活動していきたいと思っています。

子ども食堂の広がりや、新しいつながりと協働の結果です。その意味で、これまで日本でこういう活動はなかったのではないかな。どこかの団体が「これをやりましょう」と言って、みんなで一斉にやるとか、行政が何かやろうと言ってバーっとやるのが当たり前でしたが、草の根の中で、自分たち

がやりたいから場所を設けて取り組むという、この活動はすごく新しいし、民主的なものではないでしょうか。ゆるやかなつながりの中で、地域再生の核をつくり、コミュニティをつくっていく役割を果たしていけるのではないかと考えています。

そして、「食」を媒介にした、名もなきつながりを大事にしていきたいと思っています。

子どもにとって一番いいことを考えなければいけない。そのための政府をどうつくっていくのか、そのための社会をどうつくっていくのか、というのが大きな課題だし、子ども食堂も公的支援はまだほとんどありませんので、これから継続しながら、全国で小学校区に1つの子ども食堂・居場所をつくっていくために、「子ども食堂があるのが普通なんだ。どこにもあるんだ」となるように、変えていきたいと思っています。ご清聴、ありがとうございました。